

# 浦安の三軒長屋

Sangen-Nagaya In Urayasu



浦安市郷土博物館 屋外展示場「浦安のまち」  
千葉県指定有形文化財「浦安の三軒長屋」

# 千葉県有形文化財「浦安の三軒長屋」 ～博物館への移築と文化財指定～

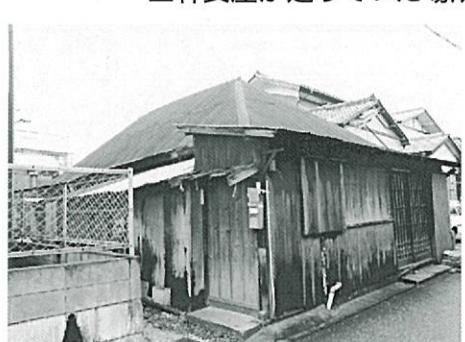
博物館の屋外展示場「浦安のまち」に移築復原された三軒長屋は、もとは市内の堀江三丁目に建っていました。昭和59年(1984)に行われた「浦安市民家調査」のなかで、実測復原調査が行われ、江戸時代末期(19世紀中ごろ)の建築であると推定されました。

東京近辺で、このような江戸時代の長屋の実物が現存している例は稀で、きわめて貴重な建造物ということができます。

かつての江戸・東京には、こうした庶民の長屋がたくさんありました。しかし、関東大震災や東京大空襲などの火災によって消失し、高度経済成長期以降は、次々と取り壊され、建て替えられていきました。簡素に作られている庶民の長屋は、耐久性が低く、文化財として保存対象となることも少なかったために、あまり残らなかったと思われます。

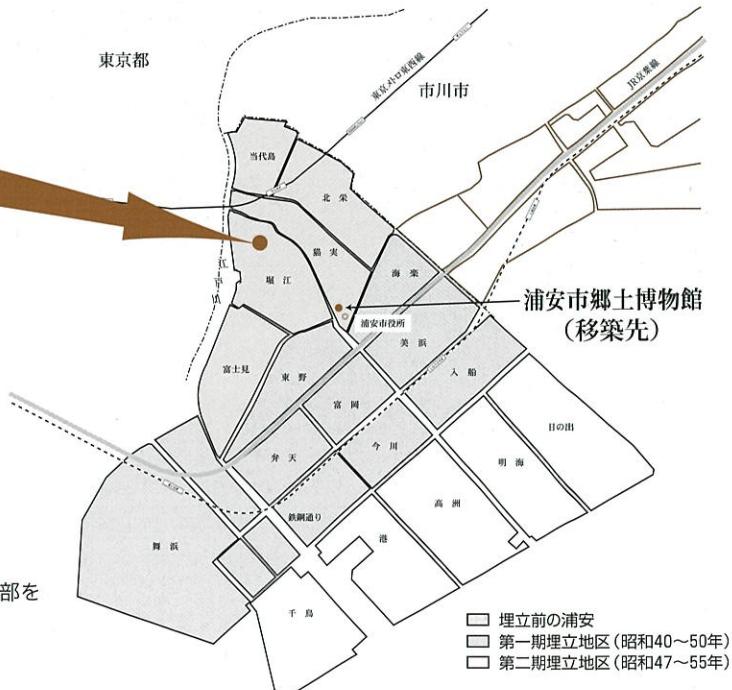
この貴重な建物を保存すべく、三軒長屋は平成9年(1997)に居住者、家屋所有者、土地所有者の方々のご厚意により、浦安市へ寄贈され、同年「浦安市有形文化財」に指定されました。その後、浦安市郷土博物館の建設に伴い、屋外展示場へ移築復原され、平成13年(2001)4月1日、博物館の開館とともに一般公開されてきました。

そして、平成18年3月14日、千葉県民の大切な文化財として位置づけられ、「千葉県有形文化財」に指定されました。



三軒長屋が建っていた場所

解体前の三軒長屋 堀江3-18-15  
解体直前まで、南側の部屋と真ん中の部屋の2軒の内部をつないで、住まいとして使われていました。  
郵便受けに手紙が入っていることからもわかります。



調査担当・移築保存修理工事監修 丸山 純

(千葉大学講師 大学院工学研究科 建築・都市科学専攻 都市環境システムコース、浦安市文化財審議会委員)

## 解体前の調査と移築復原工事

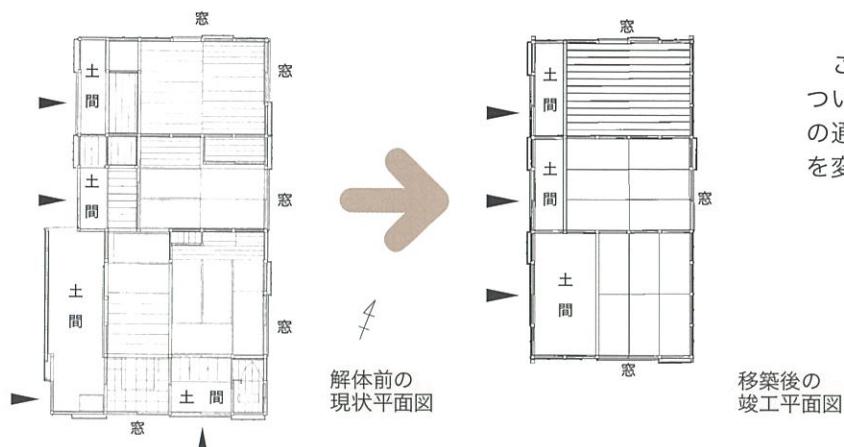
三軒長屋を博物館へ移築復原するため、解体前に詳細な調査が行われました。まず、建物の各部材に番付をつけ、そのうえで丁寧に順序よく解体しながら、改めて工法等についての考察が行われました。

その結果、建設当初の状態や、改築の過程など、解体前には明確にわからなかつた重要なことがいくつかわかりました。たとえば建設当初、天井はなかったこと、南の道路側の庇<sup>ひさし</sup>は後世の増築であることなどです。

三軒長屋は、建築後百数十年という時の流れのなかで、その時々の住人によって、住みやすいよう増改築されて使われてきたことが、確認できました。

移築復原工事の際は、間取りや形態を江戸時代末期の長屋の建設当初の姿に復原し、この建物に使われたのと同じ伝統的な工法を用いました。

柱や梁などの部材はできるだけ当初の部材を使用し、必要に応じて補強をしました。建具、下見板、釘などの部材も、できるだけ当初のものと同じ方法でこの工事のために制作しました。



この三軒長屋では、6畳一間に土間のついた住戸が3戸並んでいます。一番南の通りに面した住戸のみが、6畳の向きを変え、土間が少し広くなっています。

### 移築復原工事の過程



①玉石基礎据え付け



②柱を建てる



③屋根の小屋組完成



④茅葺き



⑤荒壁塗り



⑥床組み完成



⑦下見板の取り付け



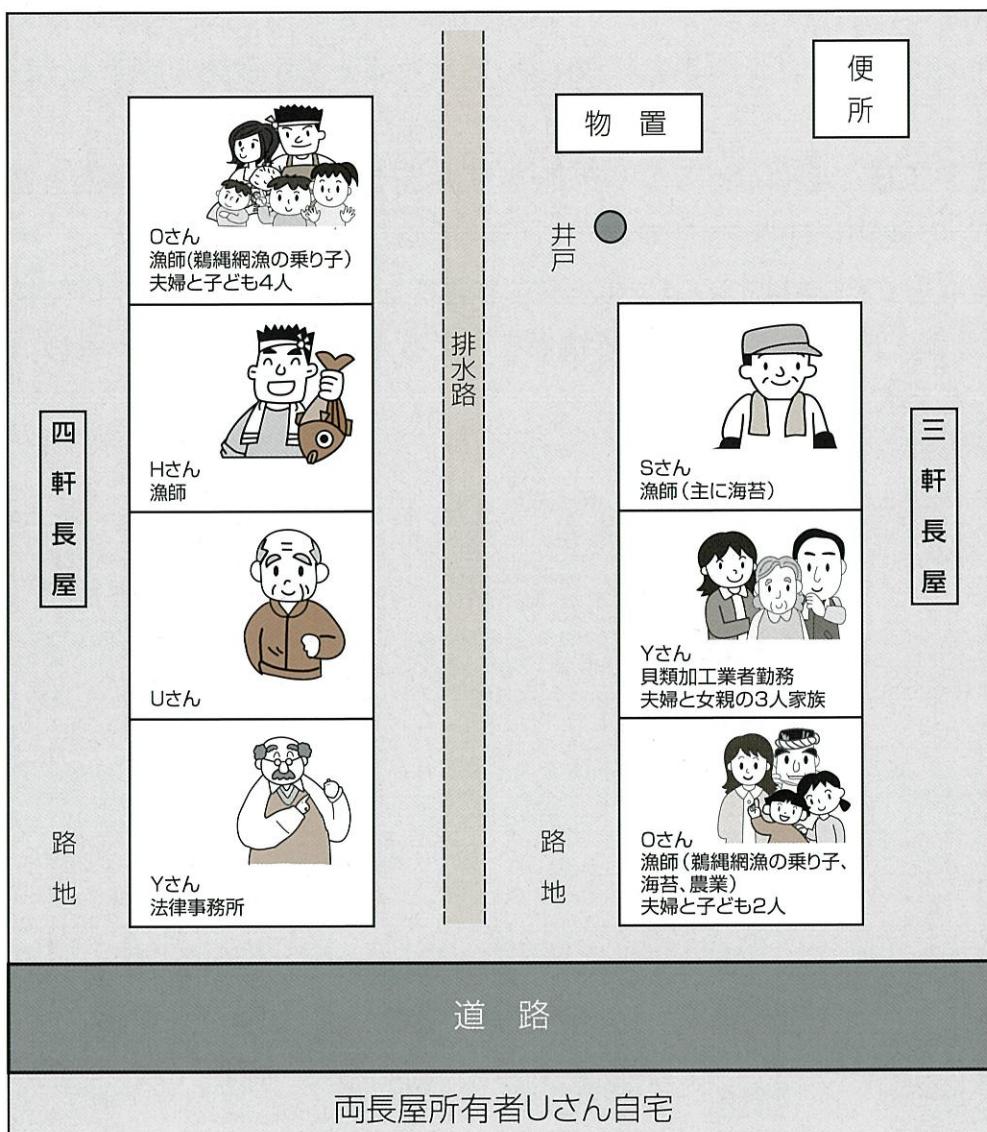
⑧土間たたき

## (昭和) 三軒長屋での暮らし

漁師町時代の浦安には、通りから一歩はいるとたくさんの長屋があって、路地はごちゃごちゃと迷路のように入り組んでいました。

この三軒長屋の隣には、瓦葺の四軒長屋が並んで建っており、道路を挟んだ向かい側には、両長屋の家主(所有者)の家がありました。

井戸、便所、水道は、この七軒の所帯が共同で利用し、お互いに助け合ながら生活していました。



第二次世界大戦前の三軒長屋周辺図  
—長屋所有者Uさんのメモより—

### 長屋での暮らし ~三軒長屋にお住まいだったOさんのお話~

私は、この長屋で育って、結婚し、自分の子どももここで育てたんだよ。

博物館へ移築されることが決まって解体されるまでの60年間、ずっとこの家で暮らしてきたの。だから、この長屋には、私の大切な思い出がたくさん詰まっているんだよ。

私の親がいつからこの長屋で暮らすようになったのか、はっきりとはわからないけれど、「関東大震災後だ」とか、「入居してから100年ほどたつ」とか、言われているよ。



## 長屋に住む人

長屋には、実にいろいろな人が住んでいたなあ。貝類加工の会社に勤めている人、一日ごとの手間賃をもらって蓮掘りをやっている人、鵜縄網漁の乗り子をしている人、うりつと(行商)や、漁師の次男坊、三男坊が住んでいたよ。



博物館の三軒長屋(真ん中の部屋)  
再現展示の一例



浦安の路地 昭和44年(1969)  
高橋順 氏 撮影



## 食事



外かまど(堀江・東学寺裏)  
秋山武雄 氏 撮影

ご飯は、土間のへつつい(カマド)で炊き、おかずは、外に七輪を出して、魚を焼いたりしたもんだよ。だからどこの家で何食べてるかすぐわかっちゃう。  
そんなこと、ちっとも気にならなかったよ。

昔は、箱膳という一人用のお膳で食べたけれど、そのうちちゃぶ台で食べるようになったんだよ。ちゃぶ台は、折りたたむことができるから、寝るときはたんて片付けて、布団を敷くんだよ。

水道がひかれる前までは、みずや水屋から買った水を水がめに入れて、飲み水にしていたんだよ。戦前で、カメ1杯5銭ぐらい。ゴミが入らないように、ブリキでフタをつくってもらったんだ。井戸は、洗い物に使ったよ。



共同水道(昭和30年代と推定)  
関口保雄 氏 撮影



## 飲み水

浦安に水道がひかれるようになったのは、昭和11年(1936)。長屋の共同水道ができたのは、それよりずっと後だったように思う。7軒の長屋の住人しか使うことができないよう、蛇口の栓は各自でもついて、水を使うときだけ、もっていって、つけてひねるんだよ。

## 共同便所



猫実2丁目に残っていた外便所



博物館に移築復原された三軒長屋と共同便所

長屋では、室内に便所はありません。建物の外に便所がつくられていて、住人が共同で使っていました。この三軒長屋では、隣の四軒長屋の住人と一緒に、仕切りで二つに分けられた外便所を使っていました。残念ながら、三軒長屋を解体した際に、便所は残っていませんでした。

そこで、市内の猫実2丁目に残っていた外便所を市が譲り受け、移築保存修理工事を行い、博物館の屋外展示場に設置しました。

この便所の建築年代は不明ですが、屋根が低く、古くからの長屋の外便所の形をよく伝えています。

## 報告書の紹介

「浦安の三軒長屋」について、もっと詳しくお知りになりたい方は、下記の報告書をご覧ください。浦安市郷土博物館のレファレンスコーナーで閲覧できるほか、市内の図書館に配架されています。ミュージアムショップでも、販売しています。

- ◇『浦安市文化財調査報告第2集 浦安の民家 — 浦安市民家調査報告書 —』 昭和62年(1987) 浦安市教育委員会 発行
- ◇『浦安市文化財調査報告第15集 浦安の三軒長屋 — 旧内田喜一氏所有三軒長屋修理工事報告書—』 平成14年(2002) 浦安市教育委員会 発行

## (江戸時代) 江戸の長屋暮らし

「浦安の三軒長屋」は、解体調査により江戸時代末期の建築と推定され、また「明治初期に東京の古長屋を買ってきて、浦安堀江に移築したものだ」という言い伝えも残っています。

江戸の町は、70%弱が武家地、15%が町人地という割合で構成されていました。武士65万人、町人60万人という人口を考えると、町人地の過密度は武家地の4倍にもなり、密集して住宅が建てられていた様子が想像できます。

文政11年(1828)の『町方書上』という史料によると、江戸町人のうち、70%が「店子(たなこ)」・「店借(たながり)」と呼ばれる借家人であることがわかっています。つまり、江戸町人の人口の3分の2以上の人々が、借家住まいであって、その多くは「長屋」に住んでいたものと思われます。

都市部で、マンションやアパートなどの集合住宅で暮らす人々が多いのは、現代でも変わらないところです。



『浮世床』 式亭三馬作 文化8年(1811)  
《船橋市西図書館所蔵》

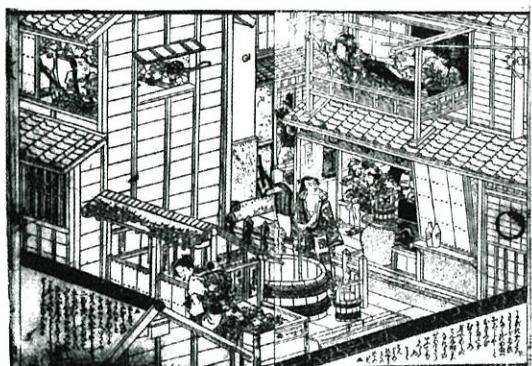
路地の入り口には、木戸があり、この奥に裏長屋が何軒も続きます。

木戸の管理は、長屋の管理人である大家(家守ともいいう)に任されており、木戸は、明け六ツ(午前6時)～夜四ツ(午後10時)まで、開けられています。たいていは、木戸のすぐ脇に大家の家があります。

木戸の入口と、左右には、住人の広告がはってあります。祈祷師や先達、医者、尺八の師匠などの名が読み取れます。

路地の幅は、3尺(90cm)～6尺(180cm)ほどです。

路地の中央に見えるのはドブ板で、下には汚水溝ができています。



『歳男金豆蒔』 山東京山作 文化9年(1812)  
《国立国会図書館所蔵》

長屋の住人が共同で使う便所やゴミ捨て場、井戸が中心に描かれています。

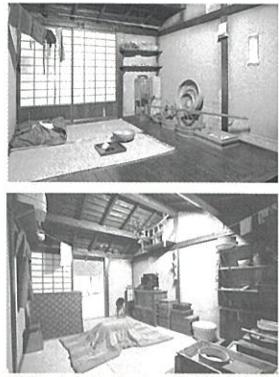
## 間取りと家賃

間取りの大半は、九尺二間と呼ばれる部屋で、「間口九尺(約2.7m) × 奥行き二間(約3.6m)」つまり「四畳半と土間」であわせて六畳(3坪)、という広さのタイプが主流でした。

土間より一段高くなった部屋は、畳が敷いてあるのは良い方で、板の間に筵を敷いて使うのが普通でした。屋根が低いために、天井板がある家はほとんどなく、屋根裏がむき出しになっていました。

それぞれの部屋は、「店」と呼ばれ、店に住む住人を「店子」と呼びました。

家賃(「店賃」)は、場所や造りによって違いがありますが、九尺二間の棟割長屋で、一ヶ月おおよそ300~500文ぐらいでした。なかには、月極めで支払えない人のために、8~12文の日掛けもありました。



参考例：江東区深川江戸資料館長屋再現展示

ひとりもの よるは おぼせい人がよる



参考例：江東区深川江戸資料館長屋再現展示

『教草女房形氣』  
(国立国会図書館所蔵)

## 長屋の台所(土間)

一畳半ほどの広さの土間に、煮炊きに使うへつつい(力マド)と流しが置かれています。水は、井戸から汲んだものを、手桶に入れて運び、水がめに溜めて使っていました。

七輪を使って、外で煮炊きをしているうちも多かったと思われます。

狭い土間の空間を有効に使うため、どの家でも棚が作られ、その棚に鍋や釜、ひしゃくなどの調理用具や調味料を入れたかめなどを置きました。



参考例：江東区深川江戸資料館長屋再現展示

『日用助食 竜の賑わひ』  
(国立国会図書館所蔵)

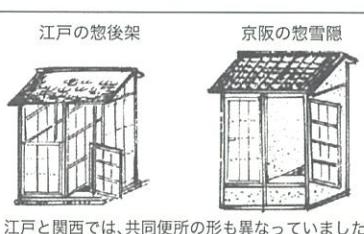
## 共同便所

江戸時代、便所のことを「後架」、「雪隠」、「手水場」としていました。裏長屋には、「惣後架」といっておりました。裏長屋には、2連式、あるいは3連式の便所小屋があり、住人は共同で使っていました。

江戸の「惣後架」は、桟瓦葺きまたは、こけら葺き。まわりは、羽目板で壁ができていますが、床はなく、足場としての板が二枚渡してあるだけです。扉の高さは、低く、立っていると上半身が見える形になっていました。



参考例：  
江東区深川江戸資料館  
再現展示



江戸と関西では、共同便所の形も異なっていました

## 井戸

井戸雪隠の地理を見て店を借り  
(『説風柳多留』)

長屋を借りる場合、便所の臭いが漂う場所を避けたいので、雪隠や井戸の位置が最大の関心事となるようです。

『守貞漫稿』(国立国会図書館所蔵)



井戸端へ  
人の嘆を汲みに行き  
(『説風柳多留』)

『教草女房形氣』(国立国会図書館所蔵)  
井戸端は、地面が水浸しになりがちなので、高い下駄を履いて、洗い物をしています。

※このページの写真は、すべて江東区深川江戸資料館を撮影させていただいたものを掲載しています。

# Sangen-Nagaya In Urayasu

"Sangen-Nagaya" (a tenement house divided into three units), which is built at the outdoor exhibition site of Urayasu City Folk Museum, was designated a tangible cultural properties of Chiba prefecture on 14th March 2006.

"Nagaya" (a tenement house) is a wooden apartment house and the construction of this tenement house is separated into a few compartments by wall and each compartment has own entrance and exit in order to be able to use as separate residence. "Nagaya" at the museum is called " Sangen-Nagaya" because this tenement house is composed of three residences.

This "Sangen-Nagaya" was existed at 3-choume Horie Urayasu city and used as an actual residence until 1997. It was confirmed by researcher of historical architecture that this tenement house had been built at the end of the Edo Era and has high cultural worth today. Therefore, it was decided that this "Nagaya" was transferred to and restored at the museum.

During the Edo Era (the 17~the 19 century), it is told that 70% of inhabitants in Edo area had lived at such tenement houses as the above mentioned.

There were many "Nagaya" for common people in not only old Tokyo but also Urayasu. However, the majority of "Nagaya" were disappeared by the fire of the Great Kanto Earthquake and the major US air raids during the 2nd world war. As the concrete constructions were mainly used for rebuilding of housing after the 2nd world war, there was scarcely the existence of actual "Nagaya" built during the Edo Era.

Therefore, it is able to mention that "Sangen-Nagaya" existed in Urayasu is extremely important building.

The museum makes endeavor not only to preserve worthwhile "Sangen-Nagaya" for the future generation but also prepare such commentary pamphlet that the majority of contemporary people are able to learn how to have lived at "Nagaya" in those days.

Translated by Keiju Kurozumi